

日本古典文學大系 96

近世隨想集

中村幸彦
野村貴次校注
麻生磯次

岩波書店刊行

近世隨想集

日本古典文学大系 96

昭和 40 年 9 月 6 日 第 1 刷 発行 ©

定 価 1000 円

校 注 者	中 野 麻	村 村 生	幸 貴 磯	彦 次 次
-------	-------------	-------------	-------------	-------------

	東 京 都 千 代 田 区 神 田 一 ツ 橋 2 ノ 3
発 行 者	岩 波 雄 二 郎

	東 京 都 青 梅 市 根 ケ 布 385
印 刷 者	白 井 倉 之 助

発 行 所	東 京 都 千 代 田 区 神 田 一 ツ 橋 2 ノ 3	株 式 会 社	岩 波 書 店
-------	-------------------------------	---------	---------

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

ひとりね	中村幸彦校注	三
解説		五
凡例		二二
本文		二五
補注		二〇九
孔雀楼筆記	中村幸彦校注	二四三
解説		二四五
凡例		二五七
本文		二五九
補注		三三九

槐

記

野村貴次校注……………三七五

解說

三七七

凡例

三九一

本文

三九三

補注

四八五

山中人饒舌

麻生磯次校注……………四九

解說

五〇一

凡例

五二三

本文

五二五

ひとりね

中村幸彦校注

解説

一 柳沢淇園略伝

淇園は元来は會禰氏（そね）、新羅三郎義光末流の甲斐源氏である（會禰家之史曆、以下一族の出自はこれによる）。父の代に主家より柳沢氏を許された。名は貞貴（きんたか）、里恭（さととも）の名は、享保十二年（か）に主君吉里の一字を拝領して以後に用いる。字は公美、通称は、幼時、権之助、その後、帯刀・図書・下野とかわり、この家代々（父兄ともに称した）の通称である権太夫をも称した。淇園は、その号、外に早く玉桂、一時の戯れに、かつら・郡山散人とも言う。室を圓福室・群玉山房と呼ぶ。修して柳里恭（りゅうりきよう）が世に通っている。

生誕は、ひとりね著述の年から逆算して宝永元年、江戸においてである。父保格（やすたか）（享保五年没、七十三歳）は早く仕えた柳沢家で、吉保の栄達と共に立身して、当時同家の家老であった。母は今井氏（延享四年没）で、正室ではなかった。保格の正室後藤氏の腹には兄保誠が、既に二十一歳になっていた。淇園の少年時代には、一部知識人の子弟で早教育の風があって、水足博泉・山田麟嶼・宮崎筠圃など神童とうたわれた人々が出た。彼もそうした早教育を受けたのではなからうか。幼くして俊敏、主君吉保からも父からも愛された。宝永七年、父の退隠に際して、禄を二分し、兄は三千石大寄合、七歳の淇園は馬廻役で二千石を与えられた。九歳の正徳二年寄合衆に進んだ。この年では、藩政に参与すべくもなく、君側に侍って趣味の相手をしたのであろう。この幼い頃からの禄仕生活は、彼の将来を予約して、その才能を学芸一筋にかける事をはばみ、やがて享保期の停滞氣運の中で、彼を一種の文人たらしめる原因となったのである。

當時の柳沢家中は吉保の、將軍綱吉の文化主義を更に甚だしくした方針の下、荻生徂徠とその門下の出入した余波もあって、文化的で、學問も多端に、多芸に遊ぶの風潮があった。幼くして淇園もその風潮の中の人となった。八、九歳で好んで花鳥を画き、十歳にして永慶寺の十五祖師図を画いた伝えは明らかでないが、十五歳で恵林寺の羅漢図の依頼をうけたことは、自ら語る所である(復益一幹書)。十二、三歳で狩野の画風の浅薄を嫌い、唐画に範を求め、やがて英元章(吉田秀雪)について、三祖の真訣を聞いて、画業は進んだ。書は自藩の細井広沢に師事した。儒は谷口元淡に朱子学を学んだのもこの頃からであろうか。何故に徂徠か又はその門下に従わなかったか不明であるが、朱子学的儒学は、彼の生涯の指導原理となったことは後述する。しかし徂徠らの間に流行した唐音は十三歳から習い始めた。師は誰人か不明ながら藩内外に鞍岡蘇山や、彼が先生と呼んでいる志村楊州(清村三先生)、それに和漢の禅僧達と、教える人に不自由はなかったはずである。禅僧悦峰と交渉をもったのが十歳頃と言う。十歳では早過ぎるし、悦峰とは限らないけれども、禅学も十代から修めたようである。十代の前半から既に「窺陳篇」(復益一)、「小倉宜季卿書」、「讀國史」(与平仲緩書)の生活であった。又芸能の方面では、十一歳觀世新九郎に入門、鼓を学ぶ。琴も学んだが、これは中止したと言う。十九歳頃は篆刻に熱心であった(摹雕秋間戲鏡序)。この外、二十一歳ひとりねを書くまでに、香道から笛までをたしなみ、沾徳・沾洲の江戸座俳人に伍して俳諧に執心した。歌書なども既に色々と読んでゐる。しかし武士としての武芸をないがしろにしたのではない。これにも相応につとめたのであって、以上掲げた諸の学芸も、それによって身を立てる為ではなく、あげて初めから士大夫としての教養であつた。よつて十五歳で著述した文宝雜話(不伝)も、文房の諸具に関する好事的なものであつた。良い意味で放蕩の學問であり、好事的諸芸であつた。それでも彼は、一度関心を抱いたものには、これに耽溺し満喫し、徹底せねばやまぬ氣風の持主であつたらしく、その熱心と器用と頭腦は、それを可能にして、あらゆる学芸を自己のものとして身につけて行つた。彼の讀書欲知識欲は、学芸と称されるものに限らず、雅から俗へ、あらゆる方面に及ぶ。西鶴・其磧の浮世草子から好色本までも濫讀した。そしてそこに見る世界の実際をもうかがうよ

うになった。精神的な放蕩から、行動の放蕩となって、折花攀柳の巷、わけて吉原に足を運ぶ。林道栄が、論語の遠方より来たる友人を色友達に見立てたことを、噂にする連中も亦、彼の周圍に居たのである。この色の道でも、芸人や茶屋揚屋の亭主仲間の文化人達と交り、やはり耽溺し満喫し、至り極めんとした。三味線・河東節のそこの芸を体得し、諸分の表裏に精通せんとした。青楼夜話(不伝)なる書を早くあらわしたという。儒・漢詩文・唐音・仏学・書・画・篆刻・鼓・三味線・河東節・俳諧・香道、それに武芸の諸技、近世畸人伝に見えて、「文学武術を始めて人の師たるに足れる芸十六に及ぶとぞ」と称される基を、二十歳前に既に身につけていたのである。恐るべき秀才児と言うべきである。

あらゆる意味で充実した淇園の青春に反して、主家柳沢家の運命は香ばしからず変動して行った。彼の生れた年十二月、柳沢吉保は甲府十五万石の主任に任じられ、世間の目を見はらせたが、これが同家繁栄の頂上であって、宝永六年將軍綱吉の死によって、吉保は致仕し、隠退し、不満のうちに正徳四年に没した。享保五年吉宗將軍となって、享保九年には、君主吉里は、大和郡山に國替を命ぜられた。禄高の問題はともかくも、一藩はその衰運を感じざるを得なかったのである。父の没後大寄合から國老に進んだ兄保誠と共に淇園も郡山に移り、その享保九年・十年(一七二四・五)の頃にひとりねを書いたのである。

淇園は享保十二年二十四歳で、嗣子のない兄保誠の養子となったが、これから同十五年にかけて彼の家庭は動揺した。曾禰家の吏曆によると、当時帯刀と称していた彼は享保十三年に「不行跡未熟之儀相重」った故をもって、兄の家督たる資格を取止められ、兄からの合力三百石で慎み勤むべしと命ぜられ、里の一字もとり上げ、名も宇佐美九左衛門と改めるべく命ぜられる一件が起った。この取扱は酷に過ぎたか、すぐに新知五百石を下され、曾禰図書と改名することになった。しかるに十四年六月兄保誠が没し、藩主の子勝熊が七歳で、曾禰伊勢と称し兄の家督を継ぎ、やがて兄の娘キヨと合せることになったが、その伊勢も享保十五年没した。今は血統の男子は淇園一人となったこの柳沢家を、全資格を復権して、寄合衆筆頭となり、彼はおそうことになる。時に二十七歳である。この間異母兄との関係は何かと想像も

出来るが、この結果は、淇園における一大転機をもたらした。淇園の青春はここに終って、後半生の生活が始まるのである。彼は本当の意味で公の生活を初めて持つことになった。長い寄合衆筆頭の時代をへて、宝暦三年には大寄合に転じている。その間、延享四年桃園天皇御即位の使者として上京、寛延元年には朝鮮使節を京都本國寺で接待の役など、晴の役目をも勤めている。宝暦六・七年の間には、池田の稲束太忠・大和大福村の杉村甚四郎と共に出資、日本海から瀬戸内海に通ずる為の播但地方における運河を計画した。彼としては珍しい事と思えるのだが、その時の書簡には、公儀の為、主君への志、諸民の為、先祖父母の追福、貧しい人の救などの言葉が見えて、公と世を思つての行動であつた。この計画は見事に失敗した。その後始末に、幕府への供託金の返還をもつて摂津川辺郡の栄根寺に寄附し、父母妻子の菩提を祈つたのは、この人らしい行為であつた(池田人物誌の稲束太忠の条・杉村翁宛書簡)。この一例にも見えて自らの柳沢家の主としてもその勤をおこたになかつた。先祖父母の供養も真面目にいとなんだ。初めの妻豊原氏多世子は、長男と共に早く没したので、二度目の橋氏を娶つては、子孫繁栄の願文を、小北稻荷に呈したりしている。藩士としても戸主としても、立派にその職責をはたしたのであつた。

しかし私生活を、豊かにすることも決して忘れなかつた。「此信といふ一字さへうしなはずば、いかやうにも平生は衆むがよき也」(ひとりね)であつた。京や大阪に出ては酒席に出入りもした(梁田蛭巖の蛭巖集後編、七「寄柳公美」など)。そして高譚雄弁したらしい。その間に女俠奴の小万との関係の噂(洒落本列仙伝)も生れ、没後寛政六年上欄の浄瑠璃、敵討優曇華亀山で「誠に緋縮緬の脚布の味しらねば、国家の政道は捌けぬといふたは柳里恭が名言」と、とりあげられる程、町の著名人、奇人としての行動もあつたであろう。又一面青年時習得した諸芸も、興生じてはこれに遊ぶを事とした。新編繡像簇新小説麟児報を、唐音の才で訳しかけたり(柳淇園先生一筆)、すゝめられては、色々の俳書に句をもよせた。琴もかなでた。「終日与君譚_ニ經史、經史譚罷亦鼓_レ瑟、君歌我和互唱酬」(橋庵先生詩鈔、中「重遊淇園感懷」)することもある。歌曲も興に乗じて作り、「さをの露」「長想思」「月の枕」「花街大鼓」「清平調」「竹夫人」などが伝っている。殊に

書画には熱心で、今に残るのは、多くこの後半生のものである。青年時代からの絵具色彩の研究、絵本による唐絵風の研究もおこたらなかった。崎人伝も「中にも画に長ず」と言い、指頭で竹を画いて、人を驚かせもした（蛻巖集後編、一）。が謹嚴、一線をもゆるがせにせぬ彩色の花鳥をも残している。現に彼が画の道をたたいたと言う祇園南海や服部南郭と共に、日本における文人画創始者の一人に数えられている。書には自在にして一種の艶のある草書と謹直な楷書を多く見るが、楷書をもって殊によしとする。これらの書画は人の乞いによって与えることもあったが、「書画之於技、可_レ以自樂、不_レ可_レ以與人、一與人、則非_レ不_レ益_レ于德_レ已_レ、或一時毀譽釀成之疵瑕、失_レ志者往往是矣」（復益一幹書）と、書いてもって人の為にするものでないを言う。諸芸と共に書画も自らを養うものであった。又「蓋性命天道之極、經國不朽之業、実不_レ可_レ与_レ技共言、而或游_レ芸樂_レ心之妙処、豈得_レ不_レ可_レ謂_レ非_レ其一助_レ乎」（小篠道人家朱画竹記）と言う反省をも持っていたのである。広く人世における諸芸の意義についても、

不佞里恭嘗言、君子之所_レ事三焉、其所_レ安也、力学務德、可_レ以修_レ身齊_レ家治_レ國平_レ天下_レ、則以為_レ之_レ首_レ也、其所_レ依也、詩賦文章、可_レ以伝_レ事於_レ後世_レ、垂_レ美於_レ不窮_レ、則以為_レ之_レ次_レ也、其所_レ翫也、琴瑟書画、可_レ以隨_レ心之所_レ之_レ、乘_レ興之所_レ至娛_レ人世半日之閑_レ、則以為_レ之_レ次_レ也、蓋書画琴瑟、所_レ不_レ可_レ廢、而或深膠_レ之、則不_レ甚益_レ于德_レ矣。

と述べる。彼の表裏公私の生活は、以上の三つをかかる階層に位置させることで、彼の生涯の中で相反することなく共存し得たのである。そして以上の三つをつらぬく精神は、かつてひとりねの色道論の中にあられた誠であった。「文以_レ誠為主、誠一而言一矣、其言一矣、則文其何_レ之、故欲_レ學_レ文者、先究_レ其理、能究_レ其理者、一言成章、彬彬其美、不務而中、無_レ學以究_レ理、闇_レ理以能_レ文者鮮矣」（文説）で、第二階層の文をささえるものは彼において誠であったが、第三階層の道の一助としての芸をささえるものも亦、誠であるべきである。その誠は理を究めることより出ずるとは、これ朱子学の論理である。朱子学では誠は天の実理にもとづく、天道の運行は自然にして、少しの差なし、この如く、人の知行も自然にして真実無_レ妄なるを誠とすると説いている。淇園はその生活信条を、この天に従うて自ら真実なる朱子

學的誠においていたのである。ただし諸事、規範的で閉鎖的な、いわゆる頭巾氣の朱子學者と相違して、自然に開放的なものと理解していたようである。晩年彼は河内高貴寺の慈雲について仏學を聞いた。慈雲の著方服圖儀(宝曆二年刊)には、その插图を画き、序を送っている。また二人の間の問答が、麤細問答の一部をなしている(慈雲尊者全集補遺)。問題は神儒仏三道にわたっているが、淇園は儒によって論をすすめながら、偏頗ひいきなき正知見を正している。慈雲は自然法爾にそなわることが正知見である。儒もその中の蛮夷の風と思慮構成の如何を知れば、我が正法の助となるなど答えている。淇園の誠の説と共鳴する所があるが如くである。武士としての公の勤と、學芸の私の業を、この誠の上にいとなんだのが淇園であるが、享保から宝曆の、停滞し偏頗を生じた徳川封建社会では、淇園自らにおいても、自然二つの間に空隙がある如くに思われ、そうした公私二面を持つ彼は社会から見れば畸人と認められた。ここに彼の文人としての性格がある。

自己の學芸への関心が、武士としての公生活によって十分に満たされない形にあった彼は、學芸の一種の後援者として、學芸の社会に身を置く生活面をも持つようになった。さまざまな文人芸術家と風交を結んだ。池大雅・玉瀾夫妻との画道をもつての交渉はつとに有名であるが、彼の圓福室を訪うた人々には、北山橋庵(橋庵先生詩鈔)、永原伯綱(南山遺稿)、江村北海(北海先生詩鈔)らの詩人、高芙蓉や釈韜玉らの印人もあった。畸人伝に見える如く一芸一能にかかわるものは、これを食客としてとどめたという。一方で誠に懇願的な借金の手紙を沢山に残しながら、一方でいわばえたいの知れない食客を幾人も抱えるという、おどかな珍現象も出現したのである。又諸方面の書に序跋を書き送っているのも、述べた如き後援者の意味においてであったろう。

彼の著述は以上述べた以外にもある。淇園遺稿(増補転写本もある)と仮に題するものや淇園隨筆など自筆のもの断片もある。前者は漢文集、後者は本草の異を述べたものである。共に浄写であるのは、刊行はともかくもまとめて後に残す意志があったが、未完成で終ったものであろうか。柳淇園先生一筆(続燕石十種第一所収)も、後人が断片を集めたもの

である。まがきの菊（二筆所見）、東里奇言（南畝文庫藏書目所見）、鬢鏡（大田南畝著麓のちり所見）など、かつてあったことは確かで、今不明のものがある。雲萍雜志や玉桂百話は、淇園の著と伝えるけれども、否定すべきもののようなのである（岩波文庫雲萍雜志の森銃三解説など）。その他、詩文・日記・書簡の残るものもある。ひとりねと一筆をのぞいた遺文は、大和文化研究第四卷第五・六合併号の柳里恭特輯号に、諸家の論文や年表その他の参考資料と共に集められている。この解説も、一々注記していないがその特輯号に多くよったものである。

宝曆八年（二七五八）九月五日、淇園は没した。年五十五歳である。今の郡山市外川の発志院^{はし}に葬る。竹窗院天外良節居士。河内経山の沙門雷音叟が墓碑銘を撰したが、遺憾ながら、その記に誤伝が多いと考証されている（植谷元「柳沢淇園の生涯」―国語国文二十四の四・補注二）。

二　ひとりねについて

この書の成立は、序文が語っている。柳沢淇園二十一歳の享保九年（二七二四）、柳沢家の甲府から大和郡山の移封があった。城受取役の一人として、その五月先発した（補注一）彼は、その地の九条、今の郡山市北郡山町堀之側の屋敷に、小姓相手の独身の生活を送ることになる。移転、それも藩をあげてのおちつかぬ気持、そしてそれは略伝に述べた如く、序に「きのふの盛なる花は今朝の嵐にさそわれ」と感懐する如く、衰運に引き込まれるような気持をとまなうだけに、彼にも一種の心の空隙があった。ひとりねはそれを埋めるべく筆を執ったのであろう。この書の中には、奈良の木辻の遊廓の噂や、郡山に移った後の奈良や生駒山の知人達のことも見えるから、一気に書き上げたものでなく、折々に書く中に、冊をなした如くであるが、それも長期にわたった様子はない。享保九年から一、二年の間になったと見るべきであらう。

内容も序に「あるは青楼の夜のあかりかゝやき、手くだの姿をあらはし」とか、「或は花のあした雪の夕ぐれ目に見

耳に聞て」とかあって、遊里の遊びや、花朝雪夕の見聞を書きのせるのであるが、前述した心境は、思を過去にはこぶのであった。江戸や甲府での経験が多くなるのもやむを得なかった。そして、この中の一条でも、行雲にむかつて、脳中を過ぎる想念の、まとまりもなくうつりゆくことを述べているが、彼の回想自体も、まとまりもなく、そして綿々と続けば、ひとりねは自ら随筆の体となった。しかし彼の経験は、略伝の条で——それはこのひとりねによって述べたのであるが——述べた如く、雅俗の諸学諸芸にわたり多方面で、しかも彼一流の何事も極めねばやまぬ類のものだっただけに、本書は誠に多彩な、充実した内容となっている。享保時代の聡明で多才多感な青年の、といっても、多くの点で、その学識にささえられた成人的見識と判断をとまっているのであるが、豊かなる青春の記が本書である。

本書は最も多くの部分を、遊女と遊びの道にさいている。その著徳川時代の芸術と社会の中で、わざわざひとりねのその部分について一章をもうけた阿部次郎は、「遊客の立場から見た遊びの哲学」と称したのがそれである。遊女の容姿風貌の洗練に耽溺することから、恋愛の最上を遊女との恋におく所、青年の気負は感じられるが、遊びという虚の中にある誠を求める、求道の中にその醍醐味を見出そうという、その見解を自他の様々の経験と反省の上に下すのであるが、これは数多い近世の遊びの論の中でも、特徴あるものである。彼は西鶴の語をかりて、「人は虚実の入物」と言うが、西鶴晩年の諦観を裏がえしたような一種の達観と言えよう。この彼の今後の生活の変転をへながらも、生涯の生活信条となつていった誠による判断が、彼の実人生の万般に働いて、諸方面の判断となつていようである。自他ともに、自然は認めざるを得ないし、芸道などを含めて物事は本質的なものを求めるべきであつて、中途半端や虚飾は否定されている。諸学芸の記事や彼に關係あつた人々の記述は、この文人の形成を物語るのみならず、具体的な記述だけに、当代の該界の事実を示すものとしても貴重である。その外、本草・言語その他関心をいだいた様々のことの、実験と文献による調査の結果をも合せのせている。実験は彼の性格によって極めて丹念であるが、文献によるものは銜学の気味がある。円機活法や本草綱目から引用しながら、その出典の名をかかげる。淇園の青年時の日本の学界はまだ、そうし

た風であつたのであり、人に見せるべきものでもなかつた故であらうが、青年の客気のあらわれとも思われる。その間に見える彼のはっきりした嗜好が、彼の女性の好みにも共通して、小さく可憐なものに向いているのも、彼の好んだ画題などとも思い合されて面白い。

文章は、所々頭注に示した如く徒然草や西鶴・其磧の用語をとり用いているが、その如く、雅俗を調合した和文に、所々に漢文体をも混じて、自在自由、情理をつくした、きめ細かさは、驚くべきものである。晩年の書簡など見てもむしろねちねちした文章の彼ではあるが、この書ではそこまでに至らない。随筆の文章とはいへ、時に彼の墨竹に見る如くさりと、時には花鳥画に見る如く行届いて、様々な面白さを持つ筆である。内容もさることながら、この書をして、近世の随筆中、もっとも文学性に豊かなものたらしめているのは、この文章もあずかつて力あると思われる。

三 ひとりねの諸本及び底本

植 谷 元

本書は近世を通じて、刊行を見ることなく写本で行われた、いわゆる写本随筆の一である。著者自筆本はすでに喪失したか、今日報告されたことを知らない。しかし、本書の存在が世に注意をひくに至つたのは著者の死の直後であるらしく、自筆本もやや後までは存在したのではないかと推定される。確証はないが、当時郡山藩柳沢侯の所領であつた勢州四日市の問屋西村庄右衛門馬曹(寛政十二年没、年五十五)の秘蔵したという一本がそれで、平秩東作(華野者談)・天明頃成)・田宮仲宣(愚雑俎)・文政五年序)らが共にこの一本によって、夫々に本書を評している。早く勢州菰野藩の南川金溪(金溪雑話)・明和初成)・閑散余録)・明和七年序)が見たものものこの一本と考えられ、すればそれは少くとも明和初年以前に既に西村氏の有に帰していたこととなる。但し、その所有は時期的には馬曹ではなく、その父庄右衛門諦信(享和元年没、年八十三)の時かと思われ、当然時代は著者の生前に大きくかさなつて、問屋西村氏と郡山藩との關係を重視すれば、その一本が自筆本であつた可能性は頗る高くなる。

その間、本書は「面白くかきし物なり」(東作)、「抜群の隨筆なり」(仲宣)などの好評で、以来盛んに書写されて、現存する写本は管見に入ったものの中でも十数本を数える。伝本の多きに比して、しかし善本は甚だ得がたい。現存諸本は夫々に何らかの差異と欠陥を有し、殊に数箇所共通の欠陥(虫損・脱文等。本文参照)のあることは、そもそも自筆本そのものに既にかかる損傷が生じていたためではないかを思わせる。自筆本のない今、テキストはそれら諸写本によらざるをえないが、ここにそれらを、書写の様態・編成・内容等から大きく甲種本・乙種本の二種に分けることにする。

甲種本

①藤井本 藤井紫影旧蔵 大本二冊 天理図書館蔵 本書は外題がないが、序題「ひとりね序」は甲種本に共通。丁数上巻五十五・下巻六十四(遊紙を含まず。以下同)。下巻二十九丁裏白紙。行数上巻十三・下巻十二。この丁数・白紙・行数は甲種本に原則的である。なお下巻四十二丁表裏上欄に朱筆書入(燕石十種刊本二十八頁参照)がある。旧蔵者の印記があるが略(以下同)。寛政期を下るまいと思われる字で、年代といい、内容といい、諸本中比較的善本として底本に用いた。

②国会本 大本二冊 国立国会図書館蔵 外題「ひとりね 上(下)」。以下、序題―行数①に同じ。①と共に書写年代も殆ど等しく、比較的信頼できる一本。本書は昭和二年楠瀬恂氏が隨筆文學選集第九巻に所収のものの底本である。

③対橋堂本 御巫清白旧蔵 大本二冊 神宮文庫蔵 外題「ひとりねの記 乾坤」。序題―行数①に同じ。下巻末に「予頃年肩痛之憂有把筆不任意依而魯魚差不少看人之希用捨耳 文化六己巳年春三月望 対橋堂主人 蔵書」と識語がある。④と共に年記を有して相関連するごとく、①②に次ぎ多く参照した一本。

④度会本 度会光根旧蔵 大本二冊 伊勢安岡家蔵 外題「ひとり寝記 乾(坤)」。序題①に同じ。丁数上巻七十九・下巻七十四。白紙の箇所なく文意非連続のままその間を連接する。行数も上下巻共不定、八乃至十四行。下巻末に「文化六己巳年早春写之」と記す。

⑤神宮文庫本 大本二冊 神宮文庫蔵 外題「ひとりね 上(下)」。序題―行数①に同じ。①②に準ずる一本であるが、書写年代はやや下るようである。